



7月例会の食事を作った3人（小野兄、米山兄、花田兄）

阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

7月例会（7月28日開催）報告

夏期修養会（8月9・10日開催）報告

暑い、暑い、まさに異常気象という言葉がピッタリの夏もやっと終わった様です。穏やかな秋を今年程願う年はありません。どうか皆様にとっても心穏やかな季節となる事を願います。

さて、今号は暑い夏に行われた、7月例会と8月の夏期修養会の報告をお届けします。

— 7月例会（7月28日開催）報告 —

7月例会は夏休み例会とでもいうような、毎回の「使徒言行録」の聖書講解は休みにして、手づくりの食事をとりながら会員の活動報告を聞いた。

まず会員消息と7、8月誕生月の会員を祝った。（なお受洗50年以上の会員は56名と報告があった）

食事は3名の会員による手づくりの「真夏の冷しサラダうどん」を味わった。これはレタスの上にコシのある阿波半田手延べうどんをのせ、さらに上に細アスパラと細切りの揚げをいためてのせ、ごまドレッシングと麺つゆを合わせた味付けで食べるという、この時期の食事として大好評だった。

活動報告は仙台ボランティアから戻った藤本兄から詳細でわかりやすい報告がされた。過去に同様のボランティア経験を持つ寺嶋兄、岩崎兄、大村牧師からも報告がされた。有意義な例会であった。



(写真：小笠原)

— 夏期修養会（8月9・10日開催）報告 —



2013 年度 信友会修養会 プログラム

会場：ナザレ修女会・エビファニー館

教会標語：「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」（マタイ 5・16）

修養会テーマ：「世の光」

第1日目：8月9日（金）

14:30 受付開始

礼拝堂にてオリエンテーション後、

開会礼拝：大村牧師

17:00 集会室に移り近況報告など懇談

18:00 夕食後 基調講演：大村牧師

自由時間（談話室にて懇談）

22:00 消灯

第2日目：8月10日（土）

6:50 起床

7:20 礼拝堂にて ミサ・聖餐式

休憩後 朝食（馬場兄：健康レクチャー）

9:00 発題（折原兄、早川兄、北兄）

2 グループに分かれ、分科会（前半）

12:00 昼食後、合唱練習（日高兄指導）

14:00 2 グループ分科会（後半）

15:35 総括と閉会礼拝

17:00 解散

実行委員長：寺嶋兄（副）日高兄 萩原兄 会計担当：杉野兄、江口兄 記録担当：玉澤兄、日高兄

庶務担当：寺嶋兄、成宮兄 会場進行：寺嶋兄 写真担当：松田兄



2013 年度修養会開会礼拝：「光あるうちに」

（ヨハネによる福音書 12 章 35～36 節）

大村 栄 牧師

今年度の教会標語であるマタイ福音書 5 章では、あなた方は世の光、地の塩であり「あなたがたの光を輝かしなさい」と言います。ヨハネ福音書では、「私は世の光である。私に従う者は、暗闇の中を歩まず命の光を持つ」と言ってください（8 章 12 節）。そして、12 章 35 節で「光が今しばらくあなたがたの間にある。光のあるうちに歩みなさい」と言っています。暗闇に追いつかれないようにという緊張感のある中で、今ではなく暇ができたなら、神が理解できるようになったらなどでは、神への甘えであり、神さまの救いは待っていて下さるかどうかはわかりません。

トルストイの小説に、「光のあるうちに光の中を歩め」（岩波文庫）があります。ローマ時代の小アジアのキリキアに、裕福な家庭に育ったユリウスとパンフィリウスの仲の良い二人が登場します。パンフィリウスの家はやがて没落し去ってゆきますが、2 年後に彼がキリスト教に入信しその共同体に属していることを知ります。ユリウスは彼と話し合ってそこに魅力を感じます。ユリウスの世俗の生活は、若い時の放蕩生活や望まない結婚などで社会的には成功しますが飽き足らず、何度もキリスト者になろうとしますが彼の優柔不断と周りの反対などで入信には至りません。老齢になってローマ帝国の栄光を捨て去り、ようやくキリスト者になりました。共同体では、厳しい労働と質素な生活に不満を言いますが、そんな時長老から、35 節の言葉、「暗闇に追いつかれないように光のあるうちに歩みなさい。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」と言われます。

彼の決断は遅すぎたのでしょうか。神さまは我々の想定を超えており、その御業は限りもなければ果てしもないのです。マタイ福音書 20 章のブドウ園の喩で、主人が労働者を 9 時、12 時や 5 時にも労働者を雇い、時間に関わらず同額の 1 デナリを支払う喩があり「後のものが先になり、先のが後になる」と言われます。ユリウスには紆余曲折があったが最後に神さまにたどり着いたのです。イチジクの木が 3 年実を付けないので切ろうとする時、もう 1 年待つことを願う園丁の喩がありますが、この園丁はキリストです。キリストの呻くようなとりなしの祈りを信じて、神さまへの真っ直ぐな光の道を辿りたいものです。



2013 年度修養会基調講演：「世の光—あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」

(マタイ5章13～16節)

大村 栄 牧師

今年度の信友会修養会のテーマは、教会標語を受けて「世の光」について考えることになりました。聖書は、マタイ福音書の山上の説教、第5章13節から16節を取り上げます。

まず、13節から、「あなたがたは地の塩である」と言います。「あなたがた」とは、4章25節のイエスの話を聞きに来たガリラヤ、デカポリス、エルサレムなど周辺地域から集まった聴衆とイエスを取り巻く使徒たちです。そして私たちも聞き手です。塩は、利他的奉仕をするもので、塩気は素材の持ち味を引き出すものです。しかし、私たちはこの塩のように同化し埋没して、自分の使命を見失ってはなりません。塩は、塩気を失ってはならないのです。

「あなたがたは、世の光である」では、塩は溶けて相手を活かしますが、光は隠されず、高く掲げられなければなりません。ヨハネ福音書では、「わたしは世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（8章12節）と言いますが、まことの光はイエス・キリストのみであり、この二つに矛盾はありません。私たちはキリストの光を反射する鏡であると考えべきでしょう。

鏡は光を直角に受けるとそのまま光源に戻るので、斜めに受けることで反射させます。鏡に歪みやくもりがあると反射を妨げます。それを完璧に整えるのも大切ですが、歪みやくもりも個性となるので、歪みを生かして自分を反映させるのが「証」になります。光とともに真っ直ぐに進むことが私たちに求められています。開会礼拝に取り上げたトルストイの小説、「光のあるうちに光のなかを歩め」の主人公のユリウスのように、紆余曲折のなかで老齢になってキリスト者になっても神さまは受け入れてくださいます。ユリウスはその後20年生きて、喜びのうちに光の中を真っ直ぐに歩みつつ生涯を終えたと書かれています。

14節の「山の上にある町は、隠れることができない」では、ヨーロッパの古い町を思い起こします。高いところにある町は隠れることはできないのです。イタリアのペルージャという町は、破壊された町の上に町を建てることを繰り返して丘になっています。町を掘り起こすと地下に町が残っています。イスラエルのエリコの町では、ヨシュア記のユダヤ人の侵入の時代でも、まだ紀元前千五百年と新しいもので、最低層は紀元前7千年の石器時代からであり、この時から破壊と建設が繰り返されて高い丘を形成しているのです。これをテル（Tell）と言いますが、高い丘の町は隠れることはできず、異邦人の侵入で破壊されても、また町を再建して光を掲げなければなりません。

15節では、「ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである」。家の中を明るく照らす「家」に注目すると、家のギリシャ語は、オイクスで、家族、国家なども表します。オイクメネーは、世界、民衆を意味します。この言葉から

(次ページへ)



(前ページより)

Ecumenism、多くの教派が一致して宣教を展開した「教会一致運動」が出ています。この教会一致運動の先駆けは、ジョン・ウェスレーであり、「世界をわが教区」と宣言して、イギリス全土に伝道を展開しました。メソジスト派は、伝統的に海外宣教に熱心であり、日本へも伝道師を最も多く派遣した教派です。カナダ・メソジストからの最初の宣教師として日本に派遣されたジョージ・カックランは、トロント大学の最有力の神学者でした。メソジスト派では、責任領域は世界であるとして、キリストの光を世界中に輝かそうとしているのです。

オイコノミアは、管理、仕事、責任や経済（エコノミー）を意味しています。オイコノモスは、管理人になります。ルカ福音書 16 章に不正な管理人の喩があり、主人に信頼されていた管理人が、不正がばれたので預かった資産を負債者にばらまき、後の生活に備えて神さまに評価されました。8 節に「この世の子らは自分の仲間に対して光の子らより賢くふるまっている」とあります。少々荒っぽくても、神に喜ばれる社会を残すことで評価を受けることがあるのです。

16 節は、今年度の教会標語になります。「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々があなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」。口語訳聖書では、立派な行いは「良い行い」でした。これのほうが自然です。世の光、地の塩として、ごく普通に信仰者として生き、キリストの光を掲げて行くことが大切です。

近年は、伝道困難な時代になり、プロテスタント教会では教勢は激減し、伝道献身者や教会学校の生徒も激減しています。昨年度には教団が「伝道推進室」を組織しました。3月31日の発会式で、前東京神学大学の近藤勝彦学長が次のように語りました。「(伝道困難に時代に) 特別なことを考える必要はありません。礼拝を中心とするごく普通の教会生活において、神の恵みに豊かに生かされつつ、福音の前進と世の人々の救いのために祈り続けることが大切です」。私たちは、この困難な時代にキリストの光をしっかり受けて輝く存在、キリストを反射してゆくことが教会の立ち直りに繋がることを信じて、日常の信仰生活を形づくって行きたいものです。

「世の光」について、ヨハネ福音書は、「言葉—ロゴス」に続いて、主イエスを「光」と表現しています。1章9節に「その光は、まことの光で世に来てすべての人を照らすのです」。闇のような世の中にも必ず朝が来るのです。しかし、11節では、「言は自分(キリスト)の民のところに来たが、民は受け入れなかった」。キリストを拒絶する民との対立の中で、キリストは3章16節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と語ります。マルチン・ルターはこの1節のみで聖書全体を象徴していると言っています。神さまは、ご自分を受け入れる者だけでなく、拒絶し敵対する者をも愛し、永遠の救いを提供して下さいます。ここに、聖書が語る神の救いの実態があります。ヨハネ福音書1章9節で「その光は世のすべてを人照らす」と言います。山の上に輝く光は教会です。一人一人が生活の場で「証」するだけでなく、教会全体が歴史を越えて神さまが創られた社会を担って行く使命があると考えて進みたいと思います。

まことの光であるキリストを証し、さらに輝かせて行きたいものです。 (文責：玉澤 写真：松田)

信友会 2013 年度 第 4 回 例会・役員会記録

日 時：2013 年 7 月 28 日 12:30 ~ 14:30 (例会後役員会)~15:00 場所：教会ホール

1. 7 月例会 (例会出席 28 名)

- (1) 手づくり食事会と震災ボランティア報告
- (2) 会員消息

(3) 7、8 月誕生月を迎えた会員を祝った。(なお信友会員の受洗 50 年以上は 56 名)

2. 役員会 (出席 11 名 教職：大村先生含む)

- (1) 信友会修養会について。出席者の確認とプログラム内容、各担当者を決めた。
- (2) 9 月例会：2013 年 9 月 22 日 (日) 礼拝後教会ホール

テーマ：使徒言行録の聖書講解 11 章 講師：大村栄牧師 司会：小笠原 敦久 以上

信友会例会開催予定 9 月 22 日の次は 11 月 24 日です (10 月はバザーがあるので休みです)